
気付いたら、そこは学園都市で

すねえく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気付いたら、そこは学園都市で

【Nコード】

N2192Y

【作者名】

すねえく

【あらすじ】

転生者の夏野太陽は、前世でいつの間にか死んでいて、雛見沢でのゲームを終えた後、この学園都市に転生された

夏野は前世の記憶を持っておらず、目を覚ますと同時に学園都市のことを知るが・・・

序章 7月19日

どうも、夏野です

転生させられた記憶はあるんだけど、どうも前世の記憶がないのよね
どうやらこの学園都市の高校1年生で、ある高校に通ってて、隣に
はツンツン頭の不幸少年上条当麻がいて・・・

この学園都市は頭の開発を平然と時間割り《カリキュラム》に組み
込んでいる場所、その学園都市に住んでいる230万人もの学生全
てが強度な超能力を持つているわけではなく、全体の6割弱が全く
持って仕えない無能力ばかりだ

レベルを判定するのは身体検査システムスキャンで、それをはかる機械どもに無能力
の烙印を押されたのが、隣人の上条当麻である

その上条当麻は、無能力であるにもかかわらず、様々な不幸が降り
かかる

そして、その上条の隣人、夏野太陽は転生者であり、前世の記憶を
持っておらず・・・

デコンボジションコンバイン
低能力者の分解結合

空気中の電子や、酸素などの粒子などを分解し、ある物質と結合し
て新たなものを作る能力

ただ低能力者であるため、砂を分解して軽くし、風で巻きあがった
ところで再び結合して砂埃をあげるといふ使いかたしかできない
それは身近なやり方であって、他にも使い道はある

砂埃をあげるのが身近なのはなぜかって？

今この状況を見れば分かるだろう

7月19日

俺、いや俺達は絶賛逃亡中なのであります

全てはここから始まった、気がしなくもない

「ええい！くそっ！くそっあーもうちくしょう不幸すぎます！！」
俺は隣を走っているツンツン頭のクラスメイト上条当麻の変態じみた叫びを聞いていた

俺達の後ろには不良が8人追ってきている
何でこんなことになってるかって？そうさ、全部7月19日が悪いんだ

明日から夏休みなのでテンションが上がっていた俺達二人は、豪華に無駄食いでもするかー！ということでファミレスに入り、酔った不良に絡まれている中学生くらいの女の子を見て、上条が助けてやっかなー、とか常軌を逸した思考回路が働いてしまったようだ

俺も反対しなかったよ？だって見捨てられねえじゃん
でもさ、トイレから不良がぞろぞろ出てくるんだよ

集団でトイレに行くのは女の子の特権だろ！？なんで野郎がぞろぞろとトイレ行ってんだよ！？

というわけで俺達は絶賛逃亡中なのであった

「てかなんで食ってもないのに食い逃げ扱いされんだよ！？不幸だ！！」

この不幸少年上条当麻は辺り構わず不幸を引き寄せ、不良に追われているこの状況から、まだ食ってもないのに食い逃げ扱いされるは散々なのだ

かくいう夏野も

「俺だって巻きこまれてんだし一緒じゃねえか！！」
今更確認した事実には直面して頭を抱える

そんなことをしている間に不良達は上条と夏野を捕らえるために追ってきている

きっと捕まった後に目を覚ますのは、傷だらけになった自分の体があつて、病院のベッドに寝ているだろう

「ちくしょう！んなことになってたまるか！」

俺は能力を使用し、砂埃を撒き散らした

デコンボリューションコンバイン
分解結合

空気中の電子や、酸素などの粒子を分解し、ある物質と結合して新たなものを作る能力

ただ低能力者である夏野は、砂を分解し軽くして、巻きあがったところを結合して砂埃をあげる使い道しかない、いや、その使い方が定着していた

砂埃で敵の目をくらませた上条と夏野は表通りに出る

そこはどこもかしこもカップルだらけで、一人身である夏野は悲しい気分になった

「見せつけかよ！？俺達はこんなことしてるってのに、こんな事以外に青春使いたいわボケ！！」

「うっ、不幸だー！！」

不良達を完全に撒くためにカップル達の間を切り抜けて、全力疾走する上条と夏野であった

そこから更に2キロほど走ると、大きな川にでた

その大きな川には鉄橋がかかっており長さはおよそ150メートルだろうか

夜の鉄橋を突き抜ける上条と夏野はふと足を止め、後ろを振り返った

「や、やっとな撒いたか・・・」

「何でお前といるとこんなことになるんだ？暇じゃないからいいんだけど、スリル感ありすぎだろ」

素直な感想を夏野は述べて、空を見上げて少し落ち着こうといったところで

「ったく、何やってんのよアンタ達。不良を守って善人気取りか、熱血教師ですかあ？」

上条の体が凍りついた感じがした

上条と夏野が走ってきた50mほど先に、女の子が1人立っている灰色のプリーツスカートに半袖のブラウスにサマーセーターという

格好の、何の変哲もない中学生くらいの女の子だ

あれ？確かあの子ってファミレスで絡まれてた子じゃ・・・
それに不良を守ってってどういうことだ？

上条はぶっ倒れるかのように後ろに体重をかけながら

「・・・っーことはあれだろ？後ろの連中が追ってこなくなったて
のも」

「うん、めんどいから私が焼いといた」

なんっー中学生だ

俺の目の前にいる中学生は絶賛ビリビリ中だ

肩まである茶色い髪が揺れるたびに青白い火花がビリビリーってな
ってるのだ

俺はあの子のこと知らないけど、上条は知ってるみたいだな

「知り合い？」

「知り合いつちや知り合いだけど・・・」

上条ははあ、とため息をついて

「つか俺が何したってんだよ」

「私は自分より強い人間がいるのが許せないの、それだけあれば理
由は充分」

いや、理由かどうかも怪しい根拠だけど、どうなのかな？

レベルが低いゲームでももうちょっと詳しい説明があると思うんだが

「けどアンタもバカにしてるわよね、私は超能力者なのよ？何の力
もない無能力者相手に気張ると思ってるの？弱者の料理法くらい覚
えてるわよ」

・・・聞き間違いだと思うんだけど、多分違うよなあ

確かに今あの子は超能力者って言った、絶対言った

合点がいったぞ・・・上条はあの子を助けようとしたんじゃないかと、
不良を助けようとしたのか

結果不良達は黒こげにされたみたいだけど、仕方ない

この街で真に強いのは、何も暴力最強！とかじゃなくて、彼女のよ
うな特待生クラスの超能力者だ

ちなみにこの学園都市には超能力者は7人しかいない

その超能力者は確か32万8千571分の一の才能の持ち主なんだっけ？

まあ凄いってことだ

そんな超能力者サマが無能力者+不幸体質と低能力者の前に立っていることは凄い事なのか？

多分凄い事だろう

「お前が32万8千571分の一の才能の持ち主なのはよく分かってるけどさ、長生きしたかったら人を見下すようない方やめた方がいいぞ、ホント」

俺の知識は間違ってたなかったみたいだ

「うっさい、血管に直接クスリ打って耳の穴から脳直で電極ぶっ刺して、そんな変人じみた事してスプーン一つも曲げられないんじゃ、そいつは才能不足って呼ぶしかないじゃない」

この学園都市はある意味ひどい場所だよな

自分にはどんな能力があるのか、とかそんな夢みたいなことを思ってきてみれば、無能力の烙印を押されて絶望するってのがある

実際230万人もの学生の中で6割弱が無能力者なのだ

そんな無能力者がいる中でも低能力者の俺はまだまじだろう

「スプーン曲げるならペンチ使えばいいし、火が欲しければ百円ライター買えばいい、テレパシーなんてなくてもケータイあるだろ、んなに珍しいもんか、超能力なんて」

屁理屈だ、テレパシー以外は即効で行えるから能力の方が便利だろうな

でも無能力者と低能力者でそんなに差がないのは事実だ

だから強能力者くらいになったらエリートってことになるんだろう
「大体、どいつもこいつもおかしんだよ、超能力なんて副産物で悦に入りやがって、俺達の目的ってな、その先にあるもんじゃなかったっけか？」

そもそもなんで上条さんは超能力者のあの子と知り合ったんだ？

気になるから、後で聞こう

「はあ？・・・ああアレね。何だったかしら、確か人間に神様の計算はできない、ならばまずは人間を超えた体を手にしなければ神様の答えに辿り着くことはできない、だっけ？」

鼻で笑ったぞこいつ

俺は腹を抱えて大爆笑したいくらいなんだが、おさえている

「はっ、笑わせるわね、一体何が神様の頭脳なんだか、ねえ知ってる？解析された私のDNAマップを元に軍用の妹達シスターズが開発されてるって話、どうやら目的よりも美味しい副産物だったみたいじゃない？」

そこで口がピタリと止まった

・・・変な空気だ、嫌だなーこれ

「・・・ていうか全く、強者の台詞よね」

「は？」

「強者、強者、強者。生まれ持った才能だけで力を手に入れ、そこに辿り着くための辛さを全く分かってない、マンガの主人公みたいに不敵で残酷な台詞よ、アンタの言葉」

川のざざざざーって音が嫌というくらいに耳に入る

いやー黙って聞いてみたらなかなかいいものじゃないか

そんな雰囲気じゃないけど

「おいおいおい！年に一度の身体検査見てみるよ？俺の能力レベルはゼロでお前は最高位《レベル5》だぜ？その辺歩いてる奴に聞いてみるよ！どっちが強いかなんて一発で分かるって！！」

単純な足し算よりも簡単じゃないか

俺は、上条にかける

「ゼロ、ねえ」

スカートのポケットに手をつ突っ込んだかと思うと、メダルゲームのコインを掴んで再び出てきた

あれ何？

「ねえ、超電磁砲レールガンって言葉知ってる？」

「あん？」

「超協力的な電磁石を使って金属の砲弾を打ち出す兵器だな、理屈はリニアモーターカーと一緒にだ」

そこで俺が口を開いた

人間って、知ってることを聞かれるとついつい喋っちゃうよね
仕方ない

「よく知ってるじゃない」

それだけ言うとピッ、と親指でメダルゲームのコインを真上へ弾き飛ばし、回転するコインは再び親指にのって

「こういうのを言うらしいのよね」

「嫌な予感ッ!？」

俺が叫んだと同時に、俺達の間をオレンジ色の光の槍が突き抜けた槍ってよりレーザーに近いな、あの子の親指からは光の残像の尾がのびていた

その後、雷のように一瞬遅れて轟音が鳴り響いた

その音を聞いて俺の体のバランスは一瞬崩れかけた

よろめく俺は、後ろを振り向く

鉄橋の路面にオレンジ色のレーザーが激突した瞬間、アスファルトが吹っ飛んだ

「こんなコインでも、音速の三倍で飛ばせばそこそこ威力がでるのよね、もつとも空気摩擦で50mも飛んだら溶けちゃうんだけど」

鉄橋のあちこちで金属ボルトがはじけ飛ぶ音が聞こえる

俺の額に、走って流れた汗とは別の汗が流れる

超能力者ってこんな感じなの？

「て、メエ、まさか連中追い払うのにそいつ使ったんじゃないかな
うな……!!」

「さ、さすがにそれはないだろ、誰だって殺人犯にはなりたくないだろっし……いや、俺死んだ？」

すぐ横をあんなレーザーが通り過ぎていったので、まだ頭が混乱している

「あんな無能力者、追い払うにゃこいつで充分でしょ、つと！」

瞬間、雷撃の槍が飛んできた

避ける？できるはずねえだろ！！

光の速さは確認してから避けれる代物じゃねえ、予測してなきゃ避けねえ

当然、俺は予測してなかったさ

人相手にそんなもんぶつけてくるってどうよ！？ありえないね！！

「上条！！！」

俺は隣にいたクラスメイトの名前を叫ぶと、腕で顔をふさいだ

上条の右手に雷撃の槍が当たり、四方八方に電撃が飛んでいった

まあな、これをくらって無事な無能力者がいるわけないだろう

普通の無能力者ならな

「で、何でアンタは傷ひとつないのかしら？」

上条の体に火傷の跡はなく、右手も吹っ飛んでいない

確かにあの雷撃の槍はもの凄い威力だった

周囲に飛び散った電流は鉄橋の鉄骨を焼いている

にもかかわらず、上条は無事だ

「まったく何なのよそんな能力、学園都市の書庫バンクにも載ってないんだけど、私が32万8千571分の1の天才なら、アンタは230万分の1の天災じゃない」

上条は右手に幻想殺し《イマジンプレイカー》という能力を宿している

この右手で触れれば、例え大きな火の玉であろうとも、光の速度の雷撃の槍であろうとも、打ち消せる

俺が偉そうに語れた義理じゃないんだがな

「そんな例外相手にケンカ売るんじゃ、こっちもレベルを吊り上げるしかないわよね？」

「・・・それでもいつつも負けてるくせに」

再び音速を超える雷撃の槍が飛んでくるが、上条の右手に触れると同時、四方八方に飛び散っていく

上条の幻想殺し《イメージブレイカー》はそれが異能の力であるならば、打ち消せてしまう

異能の力を打ち消す異能、だが身体検査では右手が異能の力を打ち消してしまうため、無能力者と判定されるのである

でも、この幻想殺し《イメージブレイカー》にも問題点がある

まず異能の力以外は打ち消せないのです、コンクリの破片は突き刺さるし、打ち消せるのは右手首から上までだ

他の場所に異能の力が直撃すれば、問題なくダメージを受ける

なので今上条は激しくあせっているであろう

「なんていうか、不幸っつーか・・・ついてねーよな」

上条は、右手を前に突き出したまま、呟く

7月19日という日を、一言で締めくくるように

「お前、本当についてねーよ」

「ちよ、俺がいるのに戦闘開始されては俺の身が持たないっていうかなんていうか、ちくしょー！！不幸だアあああああああ！！！！！！！！！！」

俺は友人の口癖を叫びながら、寮に向かって走り出していた

全てはここから始まった、気がしなくもない（後書き）

原作ベースの小説です

ここまで書くのに禁書の1巻を読み直しして、書きました

おかげで作業時間はいつもの倍くらいかかりました

その分書いた後の喜びも増えるんですが、ねえ

さて夏野君はここから先どうやって成長するのか、見守ってやってください

魔術師？何だそれ、嫌な予感しかしない

まあ、なんつーかあれだよ
不幸だな

俺は何事もなかったように学生寮の一室で眠っていたわけなんだが
何事もなかったわけじゃない

昨日戦闘に巻き込まれないように全力疾走（二回目）をして学生寮
に逃げ帰ったわけだが

その途中で後ろから電撃の槍が飛んできてすぐ横を通ると、目の前
の地面に当たって破片が飛び散ってきて、なんとか避けて恐怖にお
びえつつ帰ったわけなんだけど

学生寮につくと同時に、雷がドーンと落ちてきて目の前が真っ白にな
って、部屋に入ったら家電製品が全部パーになって、冷蔵庫にな
んにもなくてよかったと心底思いたかったが、生憎中身はあるわけ
で今俺は朝飯にありつけない状態になっていて・・・

つまり、そういうことだ

上条の不幸体質が俺にも伝染ったか？

その上条は多分今頃補習に行ってるんだろうけど

俺はそこらへん全然問題ないし大丈夫だと思う、思うだけ

・・・気晴らしに散歩に行くか

と思ったら電話が鳴って『夏野ちゃんバカだから補習です』と
いう担任からのラブコール

まじかよ、俺補習受けなきゃならんほどバカだった？

ちくしょう、さっきの全然問題ないは取り消したバカ野郎！！

俺はため息をはきつつ、準備をしてから学校に向かう

それにしても俺の能力は強いはずなのに低能力なんだよな

誰かに特訓つけて貰おうにも相手がいないし、当然上条では相手が
務まらない

・・・昨日のビリビリ中学生はどうだろうか

あんなことがあつて非常に頼み辛いがなんとかいけるんじゃないか？
そんなことを考えていたら学校に辿り着いていた

夏休みに補習つてこんな悲しいことはねえよ

教室のドアに手をかけ、横にスライドして教室に入る

俺は自分の席に座ると前を見た

「はいそれじゃ先生プリント作ってきたのでまずは配るですー。

それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー？」

このクラスになってから1学期過ごしてきたけど、まだありえない
と思う

我が1年7組の担任月詠小萌は教卓の前に立つと首しか見えなくな
るといふとんでもない教師だった

身長は135cmで、そのまま赤いランドセルを背負ってそうな1
2歳の少女にしか見えない

学園都市はそんな研究までしてたのかと言いたくなくなるところだが、
これで自然である

「おしゃべりは止めないですけど先生の話を聞いてもらわないと困
るですー。先生気合を入れて小テストも作ってきたので点が悪かつ
たら罰ゲームはすけすけ見る見るですー」

「それって先生あれでしょ！？目隠ししてポーカーしろつてやつあ
れは透視能力専攻の時間割りだし手元のカードも見えないのに10
回連続で勝てるまで帰っちゃだめとかそのまま朝まで生居残りだと
わたくし上条は思うのでせうが！」

「はいーけれど上条ちゃんは記録術かいほつの単位足りないのではどの道すけ
すけ見る見るですよー？」

同情するぜ上条、今日俺に不幸が降りかかってこないことをお祈り
しとくよ

「・・・むづ、あれやね、小萌ちゃんはカミヤんが可愛くて仕方な
いんやね」

上条の隣に座っている青髪ピアス学級委員が訳の分からないことを
言っている

俺は多少なりとも理解できたがな

「・・・おまいはあの楽しそうに黒板に背伸びしている先生の背中に悪意は感じられんのか」

「・・・なに？ええやん可愛い先生にテストの赤点なじられんのも、あんなお子様に言葉で責められるなんてカミヤン経験値高いでー？」
「救えねえ、ロリコンの上にMかよ」

「ロリコンの上にMかテメエ！！まったく救えねえよ！！」

「あつはーッ！！ロリが好きなんとちゃうでー！！ロリも好きなんやでー！！」

くっそコイツ、早くどうにかしねえと

手遅れだが

「はいそこっ！それ以上しゃべりやがったらコロンブスの卵ですよー？」

コロンブスの卵ってのは逆さにした生卵を机の上に立ててみるってことだ

サイコキネシス
念動力専攻の人間だって脳の血管ちぎれそうになるまでやって、卵をこけないようにする、なぜそこまでかというと、念動力が強すぎて卵が割れるとかいったそういうアレだ、例によって成功しなければ朝まで生居残りとなる

上条と青髪ピアスは同時に教卓にいる月詠小萌を見た

「おーけーですか？」

2人からすれば、この笑顔はとてつもなく恐ろしいものだろう

俺しゃべんなくてよかったな、上条がかわりに突っ込んでくれてるからよかったんだけど

すけすけ見る見る、ましてやコロンブスの卵なんて死んでもごめんだね！

「・・・なあカミヤン？」

「あんだよ」

「小萌先生に説教くらうとハアハアせえへん？」

「テメエだけだ馬鹿！！もう黙れ、黙れ馬鹿！！サイコキネシス念動力にも目覚め

てないのに生卵と戯れてたら夏休み終わっちまうわ！！分かれこの
エセ関西弁！！」

ちよ、お前等、コロンプスの卵が・・・

「エセ？・・・ええええエセいうな！！僕はほんまに大阪人やね
んな！」

「黙れ米どころ出身、イライラしてんだから無駄にツツコミいれさ
せんなよ」

「こ、こここ米どころ違いますよ！あ、あーたこ焼き美味しいなあ」
「無理矢理な関西属性やめろ！テメエは役作りのためにたこ焼きお
かずに飯食えんのか！」

「いや何言つてん、いくら大阪人でもたこ焼きオンリーに食卓を彩
るわけないやろ」

沈黙

「・・・」

「ないやろ？ないと思う・・・いや待ち、けど・・・でも、ない、
けど・・・あれ？どっち？」

「メツキはがれてんぞ関西もどき」

上条ははあ、とため息をついた

まあこんなバカの相手してりゃ疲れるわな

てかこんなエアコンもない蒸し風呂状態の教室で補習してるのもプ
ラスされるから余計だな

俺はエセ関西人の相手してなくてもすでにグロッキー状態だもん
もつとレベルが高かったらこんな暑さどうとでもなるんだろうけど
な！

分解できるもんは限られてるし役に立たないわけじゃないけど、戦
闘には使えないよな

そもそも戦闘なんてやるかどうかも怪しいけど

この世界に補習なんてもんがあるから悪い、ちくしょうこうなりや
意地でもレベル高くなってやる

っ！か暇だ、なんで俺は不良達との追いかけっこや夏休みの補習な

んぞに青春削られなきゃならんのだ

俺だつて年頃の男の子だし、もっと青春してえよ、昨日のカップルみたいに

見せ付けやがって気にいらねえ、ちくしょう祝つてやる！

こんなことを考えてて虚しくなったので、俺も思わずため息をついた
上条の方から舌打ちが聞こえた

おーおー話も聞かずに窓の外のテニス部のひらひらに夢中ですか、
いいんじゃないかな、そういう青春も

俺は上条の不幸体質を痛いほど知ってるので小萌先生には言わない
が、果たして青髪ピアスは・・・

「センチ上条君が窓の外の女子テニス部のひらひらに夢中になっ
てまーす」

予想通りだな、ほれみる、小萌先生が沈黙してるじゃないか

上条は窓の外から教室に顔を向けた

授業に集中してない上条にシヨックを受けてるみたいだ、まるでサ
ンタさんの正体を知ってしまった12歳の冬みたいな顔をしている
俺はサンタの正体なんてとうの昔に知ってたけどな

そして俺を除く鋭い痛いほどの視線が上条にそそがれた
気の毒なり、上条

ねえ、なんで俺も付き合わされたの？

夏休みの補習と言っておきながらしつかりと完全下校時刻まで拘束
された

風力発電の三枚プロペラが夕焼けにきらきら光ってやがる

そんな風力発電のプロペラを見ながら俺の隣にいる上条は

「不幸だ・・・」
と呟いた

一日に数10回は言っているこの台詞は俺の口癖になりかけの代物だ
俺は上条の隣にいるせいかな、様々な不幸が降りかかり、巻き添えを
くらっている

俺と上条が同時にため息をつく

「あついたいた、この野郎！ちよつと待ちなさ・・・アンタ達よ！
止まりなさいってば！」

あー俺暑さのせいで幻聴まで聞こえてきたのか
昨日のビリビリ中学生だと気付いたのは、後ろを振り向いて姿を確
認してからだつた

肩まである茶色い髪に、灰色のプリーツスカートに半袖のブラウス
にサマーセーター、間違いなくビリビリ中学生だ

「あー、またかビリビリ中学生」

「ビリビリいうな！私には御坂美琴ってちゃんとした名前があんの
よ！アンタ初めて会った時からビリビリいつてるでしょ、いい加減
覚えなさいよ！」

俺はふと朝考えていたことを思い出した

そーいや特訓つけてもらおうって考えてたなー

「そーいやビリビリ、頼みたいことがあるんだけど」

「アンタまでビリビリ言うなー！！」

そーいうとビリビリ・・・御坂美琴サンはビリビリーと前髪から電
撃を散らす

そのままタイルを勢いよく踏みつけた

瞬間、辺りを歩いてた人々の携帯電話がバキリ、といやな音を立てた
商店街の有線放送がプツンと切れ、そこらを走っていた警備ロボッ
トがビキリ、と音を立てた

そこまできて、嫌な予感がした

警備ロボットの警告が始まる前に・・・

俺は御坂と上条を掴んで逃げ出した

直後、警備ロボットのビービーという警報が辺り一面に鳴り響いた

何で、俺も一緒に逃げてるんだろ？

あーそーだそーだ、頼みごとがあるからだ、これは仕方ない事なん
だよ

でも上条まで巻き込んだのは悪かったかなー

さつきから御坂と上条がぎゃーぎゃー言ってるし、結構うるさいから止めに入ることにした

「はいはいケンカはやめなさい、ビリビ・・・御坂も勝てないからってそんなに言うんじゃないやありません」

「うっさい！口出しすんな！」

あらあら、小さい子供みたいね

御坂はビリビリーとしていたが、一瞬止まって

「・・・そういやさつき頼みたいことがあるって言うってたわよね？」

「覚えててくれたのか！なら話は早い！」

まさか人の言葉をちゃんと聞いているなんて！お兄さん感激！！

口に出したら間違いなく俺は黒コゲになってるな

「特訓つけてください」

「は？」

俺は深々と頭をさげてお願いした

「・・・理由は？」

デコンボリューションマシン

「俺の能力は分解結合つって粒子とかそんなのを分解し、他のものと結合して新たな物質を作れるって能力だ、俺は低能力者だから全然役に立たないけど、高レベルになったらもつと社会のために役に立てると思っさ」

俺は頭を上げてそう言った

実際、ほとんどの理由は上条と一緒にいる時の不幸トラブル回避のためなんだが

御坂はうーんと腕組みをして、何度か考える仕草をしてから

「・・・別に、いいけど」

ヤッター！！まさか承諾してくれるとは！！

俺完全にだめ元で言ったのに、人生分かんねえもんだな！

「えーっと、名前は？」

「夏野太陽、上条のクラスメイトで部屋は隣で不幸撒き散らされてるその人です」

「俺に文句言つてねえ？」

「文句は言つてねえよ、退屈しないからいいんだけど毎日不良に追い掛け回されたら体が持たん」

「アンタ等毎日なにしてんのよ・・・」

御坂にため息をついて呆れられた

そうなるわな、普通

ほぼ毎日不良に追い掛け回されてる奴なんてそうそういないだろうし

「じゃあ今からやつぞ！」

「今からだつたらなんだし、夜中でいい？」

「御坂が駄目なんじゃ・・・」

「見つからないようにすればいいの」

そういう問題か、てかこうも真剣に特訓してくれるとは

「携帯番号も交換しとくか、都合あわない日もあるだろうし」

「そうね」

俺は携帯を取り出して、番号を交換する

「ついでにアンタも」

「なんで俺が？」

「戦う時のためよ、いちいち探すのもめんどくさいし」

「うわぁ・・・」

そういういつもしつかりと番号を交換する上条

御坂は黙ってりゃ美少女だしな

俺達はそれだけの動作をして、別れた

御坂が上条に決闘を申し込む前に早々と逃げたので問題なからう

俺と上条は寮についたんだが、こりゃどういうことだ？

清掃ロボットが上条の部屋の前にいたかと思うと、それに近寄ったら女の子がぶつ倒れてて、背中から血を流してる・・・

「何だよ、一体何なんだよこれは！？ふざけやがって、一体どこのどいつにやられてんだお前！！」

「うん？僕達、魔術師だけど？」

その声は、階段の方から聞こえた
声の主を見ると、白人で2メートル近い身長だったが、顔には少し
幼さが残っている

服は神父さんが着ているような漆黒の修道服だった
ただし、こいつを神父さんと呼ぶ奴がどこにいるだろうか？

甘ったるい香水の匂いが感じられ、肩まである金髪は赤に染め上げ
られ、左右10本の指にはメリケンのように銀色の指輪がずらりと
並んで、耳には毒々しいピアス、ポケットに携帯電話のストラップ
がのぞき、口の端では火のついた煙草が揺れて、極めつけには右目
のまぶたの下にバーコードの形をした刺青タトゥーが刻み込んである

神父と呼ぶべきか、不良と呼ぶべきか

てか歳は14か15じゃないのか？煙草とかすってて大丈夫かよ
それに、こいつ魔術師っていったか？

この学園都市の超能力も異常だけど、魔術ってなんだ？

「うん？うんうん、これはまた随分と派手にやっちゃって」

口の端の煙草を揺らしながら魔術師は辺りを見回す

「神裂が斬ったって聞いたけど、血のあとがついてないから安心安
心とは思ってたんだけどもねえ」

斬った、って何を？

この子をか？魔術師が？

目の前に立っている奴が斬ったんじゃないと聞いて分かるけど・・・

「けど、何で・・・」

と上条が言う

上条はこの子を知ってるんだろう、だからこの子は上条の部
屋の前にいる

「うん？ここまで戻ってきた理由かな？さあね、忘れ物でもしたん
じゃないのかな、そういえば昨日背中を撃った時点ではフードがあ
ったけど、あれってどこで落としたんだろうね？」

それを言ってから上条と魔術師の口論が始まった

俺はただ、呆然とするしかなかった

魔術が存在したという現実、魔術師が今目の前にいるという現実
そして、今目の前に少女が倒れている現実

なんだ、これだけあれば充分じゃねえか

魔術師はステイル・マグヌスと名乗ってから、魔法名といわれるもの・・・言うなれば、殺し名

Fortis931、強者、という意味だ

魔術を使うときには真名を名乗っちゃいけないらしい
どうでもいいがな

「穏やかじゃねえよなあ・・・」

俺はそこで初めて口を開いた

ステイルは俺を見て、顔をしかめた

「そうかそうか、君も痛い目にあいたいみたいだね・・・」
そう呟くと

「炎よ」

突如、魔術師がそういった瞬間炎剣が作り出された
そして

「巨人に苦痛の贈り物を」

炎剣を横殴りに叩きつけてきた

その炎剣は、上条の右手に打ち消されるべきだった

だが、上条の右手に触れることなく炎剣は消え去った

「なっ・・・!?!?」

上条も驚いている

俺が高レベルの能力者なら、驚かなかっただろうな

俺は低能力者、炎を分解して消し去るなんて芸当、できるはずがねえ
でも、できちゃったもんは仕方ねえ

「面白い顔してんじゃねえか魔術師。テメエは可能性を考えるべき
だった・・・何も魔術は科学より勝ってるなんてことはねえ、テメ
エの力が通用しない可能性を考えるべきだったんだ」
俺は自分でも驚きつつ力を振るう

「行くぞ上条、このクソ野郎に一泡吹かせてやんだ」

「・・・ああ」

上条は笑って答えた

それに応えるように俺も笑う

「覚悟しろよクソ野郎、助けてくれつつたってもう遅い、そこに女の子が倒れてて、テメエが魔術師で、それだけありや充分だ、ぶつ倒すべき対象は、目の前にいるんだからよ」

特訓、する前に戦闘しちまったな

魔術師？何だそれ、嫌な予感しかしない（後書き）

ありゃ、低能力者なのにすげえ力使ってる
どうもすねえくです

主人公は不思議ですね、何かいきなりレベル上がったっちゃってる
有り得ないことなんです、主人公はやってのけちゃいました
ここらへんの説明は、身体検査の時に夏野が無意識にレベルを調整
してしまっただという事で、いいんじゃないかな！

戦闘の時に本来のレベルの力を引き出せる、特殊なやつ
戦闘じゃなくて本気の時つていえばいいんでしょうかね
怒ってる時とか、真剣な時とか

不良から逃げてる時は真剣だけど、違う意味の真剣で逃げるための
手段を考えてるわけだから砂埃、低能力しか使えない
改善のしよふはあるけど、それに気付かないもんだから改善できない
本当に、ややこしいですね

高電離気体砲へプラズマキャノン

炎は完全に消えたわけではなく、舞い上がる火の粉が再び集まっていき、俺と上条を包み込んだ

だが俺達は全く動じず、上条に目でサインを送る

右手が炎に触れた瞬間、炎はバースデーケーキにささったロウソクの火を全て吹き消すように消え去った

魔術師は、心底驚いたような顔をしていた

そりゃそうだろう、目の前にとんでもないイレギュラーが存在するのだから

どっちも炎がきかないし、実際に両方に一度ずつ炎を消されているもはや魔術師ではなくただの人間だった

魔術師なんてもんは普通の人間にすぎないし、殴れば痛みを感じる、カッターで切れば傷がつく、血は赤いし、緑色でもない

そうだ、ただの人間だ

俺は魔術師というクソ野郎を殴り倒すべく、一歩ずつ近づいていく
それにあわせて上条も一歩ずつ

「チツ!!!」

魔術師ステイルは右手を水平に振るう

生み出される炎剣を同じように勢いよく叩きつける

いや、叩きつけようとしたり、が正解かな

俺は即座に分解して、炎の効力を打ち消した

俺の能力は完全に消せるわけじゃないけど、効力をなくすことはできる

その間にも、一歩一歩、確実に近づいていく

再び炎が巻きあがるが、それを上条が右手で触れ、完全に打ち消す
ステイルの頬を汗がたうのを確認できた

そりゃ、あせるよな、自分が積み上げてきたモンが目の前にいる
この誰だか分かんねえ奴等にぶち壊されんだ

上条の原理、つーかどうやって打ち消してるかは分かるだろう

右手に当たりゃあ打ち消されるんだ、それだけで右手に当たればとりあえず炎は消されるって認識ができる

でも、俺はどうだ？

実際触れずに炎を消す、分解してるわけで、科学側じゃなくて魔術側の奴等にはどう考えたって有り得ない話だ

つまり、上条はどうか対処できても、俺がいるってことだ

近づいていくと同時に、ステイルの体が震え、それを誤魔化すように更に炎剣を作り出し叩きつけた

今度は上条が触れただけで完全に無効化される

上条が炎剣を右手で叩いた瞬間炎剣が粉々に砕け散り、虚空へ溶けるように消え去った

俺と上条は、もうステイルが目の前のところまで歩いてきている

後一步、後一步で殴りかけられる距離まで

「世界を構築する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ」

ステイルの体から汗が噴出している

それ以上に、今やっている詠唱が気になった

「それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。

それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。その名は炎、その役は剣。顕現せよ、我が身を喰らいて力と

為せッ！！」

ステイルの修道服の胸元が大きく膨らみ、内側からの力でボタンが弾けとんだ

炎が酸素を吸い込む音と同時に、服の内側から巨大な炎の塊が飛び出した

「・・・なんじゃこりゃ」

ただの炎の塊、とは言い難かった

重油のように黒くてどろどろしたものが芯になっていて、それが永遠と燃え続けている

それは人の形をしていた

学園都市なら高レベル相当だろうか

だが、それは上条の右手に触れると、水風船を針で刺したように飛沫となり、辺り一面に飛び散った

にもかかわらず、ステイルは笑っていた

何だ？おかしくなったのか？切り札を消されて、とうとうおかしくなったのか

だが、違った

おかしくなったわけではない、さっきのが必殺と呼ぶに相応しいものだったからだ

ビュルン、という粘液が四方八方から響渡った

その瞬間俺と上条は咄嗟に後ろに下がった

四方八方から戻ってきた黒い飛沫が空中で寄り集まり、再び人の形を作り上げていた

後ろに下がっていなかったら、今頃俺はあの炎に包まれ焼かれていただろう

それを考えると、ゾクリとする

上条の右手は、異能の力なら何でも打ち消せるはずだ

だったら今目の前にいる炎の巨人はどうやって説明する？

確かに一度打ち消したはずだ、だが再び黒い飛沫が集まり、人の形になった

炎の中の重油はのたくり、形を変え、まるで二メートルほどもある十字架を両手で持つような形になる

それは大きく両腕を振り上げると、俺達の頭の上に振り下ろした

上条は咄嗟に右手で受け止めた

上条が受け止めてなかったら、俺達は今頃炎の巨大な十字架に焼かれ、灰になっていただろう

炎の十字架は、上条の右手に触れたにもかかわらず、消えない

一目見れば、上条の方が押し負かされているようにも見える

いや、見えるだけじゃなくて、実際そうだろう

炎の十字架は、どんどんと俺達へと近づいてくる

上条の幻想殺しがきいてない・・・！？

そうか、分かった、きいてはいるんだ、実際こいつは一回消えたし、幻想殺しに反応しちやいる

でも消滅した直後に復活しているんだらう、おそらくタイムラグは1秒の10分の1にも満たない

「上条！そいつは・・・」

俺が伝えようとしたところで

「分かつてる！！」

上条は答えた

この状況でよく考えれるな・・・

これで分かる事は、右手を封じられたってことだ

俺の分解でも再生には追いつかないだらうし、そもそもこんな炎を分解できるかどうかも怪しい

このままでは、俺達は灰にされる

どうにか突破口はないかと考えているところで

「ルーン」

と、声が聞こえた

明らかにステイル、上条、そして俺の声じゃない

だとしたら、誰の声かは分かるだらう

「神秘、秘密を指し示す24の文字にして、ゲルマン民族により2世紀から使われる魔術言語で、古代英語のルーツとされます」

俺は、信じられなかった

だって、誰かは分かっているのに、その誰かは確か血まみれになつてたはずだからだ

それなのに、何でそんな冷静なんだ？

「魔女狩りの王を攻撃しても意味はありません。壁、床、天井、辺りに刻んだルーンの刻印を消さない限り、何度でも蘇ります」

上条は、右手を左手で押さえ、辛うじて炎の十字架との均衡を保つ俺と上条は、同時に振り返った

そこには、1人の少女が倒れていた

だが最初に見たときとは違う、機械のような、あまりにも感情の欠落した瞳だった

言葉を口にする度に背中から血が溢れるのが分かる

まるでそれは少女の形をした、魔術を語るためだけの装置システム

「お、まえ、インデックス・・・だよな？」

上条が知っている少女、インデックスという少女とは違つたようだ

「はい、私はイギリス清教内、第零聖堂区 必要悪の教会ネセサリーウス所属の魔

道書図書館です。正式名称は Index - Librorum - Pr

ohibitorium ですが、呼び名は略称の禁書目録インデックスで結構です」

俺は、淡々と語るインデックスに、寒気すらおぼえた

今襲い掛かってきている、炎の十字架を忘れてしまつほどに

「自己紹介が済みましたら、元のルーン魔術に説明を戻します。それは簡単に言えば、夜の湖に映る月と同じ・・・いくら水面を剣で切り裂いても意味はありません。水面に映る月を斬りたければ、ま

ずは夜空に浮かぶ本物の月に刃を向けなければ」

そこまで言われると、目の前の魔女狩りの王のことを思い出した

簡単に言うと、これは本体ではなく、これを動かす動力源があると

いうことか？

車のエンジンと同じような、動力源が

だとすればその異能力を打ち消せば、この魔女狩りの王を打ち消

せるのか？

「灰は灰に」

炎の巨人の向こうで、ステイルが右手に炎剣を生み出していた

「塵は塵に」

さらにもう一本、左手には青白い炎剣が音もなく伸びる

「吸血殺しの紅十字！」

言葉と同時に、大バサミのように2本の炎剣が襲い掛かる

二本の炎剣と、炎の巨人が激突し、一つの巨大な爆弾と化して大爆

発を巻き起こした

俺はなんとか分解して防いだが、黒い煙が晴れると、上条の姿が見

えなかった

「!?!」

「魔女狩りの王」

ステイルがそう呟くと、手すりを越えていった

「・・・そういうことか」

多分上条はてすりから降りていったんだろう

滅茶苦茶しやがるな

「君はどうするんだい？さっきの奴みたいに異様な力を持つてるみたいだけど、あいつが始末されたら次は君の番だよ」

俺は戦闘態勢に入る

「上条が絶対何かしらの突破口を掴んでくる、俺はそれを信じてお前を止めるまでだ」

「灰は灰に、塵は塵に、吸血殺しの紅十字!」

2本の炎剣が襲い掛かる

俺はそれを分散させるが、ステイルが炎剣を構え、突進してくる
炎剣を分散させようとしたが、さっき分散させた炎が巻きあがり、俺を囲む

それを分散させると目の前にステイルがいて、炎剣を振るっていた
分散させようとするが間に合わず、炎剣が爆発した

「ツー!!!」

熱い

(細胞の結合・・・!!!)

火傷した部分を治していく

だがそれは完全とはいわず、少しだけ治る

「火傷まで治せるのか、もはや魔術に近いかもね」

俺はステイルを睨みつける

戦闘経験の差、それは単純なものだ

俺は不良から逃げてただけの高校生に対し、相手は殺しのプロ、魔

術師

差は明らかだった

でも、そんなくだらねえモンで諦めれねえ

「炎よ・・・巨人に苦痛の贈り物を!!!」

ステイルは炎剣を振るう

俺は後ろに跳んで、辛うじて避けた、と思ったが

瞬間、爆発して、俺の体が飛ぶ

「かッ・・・!!!」

無様に地面に転がった

口の中に鉄の味が広がる

(火傷を・・・修復!)

ある程度、治す

「本当に不思議な力だね、でも力の差は歴然かな」

「舐めんじゃ・・・ねえぞ!!!」

俺は、立ち上がる

上条の到着を待つて、突破口が開くと信じて

すると、突然火災報知器のベルが一齐に鳴り響いた

「!?!」

ステイルは上を見上げ、俺も思わず顔を見上げた

スプリングラーが、人工の雨を降らしていた

「・・・なあ、ルーンって何なんだ?」

「・・・はあ、教えてやる義理もないんだけどね、紙に刻印を刻む

のさ、インクやらなにやらでね」

そこで、俺は気付いた

上条が火災報知器を作動させた意味を

ステイルは分かかってないのか?

などと考えていると、キンコーンというエレベーターの音が聞こえる

・・・きたか

そこには、上条当麻が立っていた

「そーいや、ルーンってのは壁や床に刻むモンだったんだっけな」

冷たい人工の雨に打たれながら、上条は続ける

「・・・ったく、参ったぜ、アンタすげえよ。正直、ナイフ使って

刻まれてたら勝ち目ゼロだったよ、こいつは周りに自慢したって構わねえぜ」

上条は天井を指差す、スプリンクラーを

「まさか、まさか!!!3000度もの炎の塊が、こんな程度で鎮火するものか!!!」

はぁ、と俺はため息をつく

上条は気付いたか、とでも言いたいような顔で俺に視線を送ってくる

「ばーか、炎じゃねえよ、テムエは人ん家ちに何べたべた貼り付けてやがった?」

紙は水に弱い、幼稚園児でも分かる事だ

「魔女狩りの王!!!」

叫んだ瞬間上条の背後から、炎の巨人がエレベータの扉を溶かしながら這い出てきた

「は、はは!あははははは!凄いよ!君ってば戦闘センスの天才だね!ただ経験が足りないかな、コピー用紙ってのはトイレトペーパーじゃないんだよ、たかが水に濡れた程度で完全に溶けてしまうほど弱くはないのさ!!!」

ステイルは、気持ちいほどの笑みを浮かべた

でも気の毒だよなあ・・・まだ気付いてねえ

上条は右手で魔女狩りの王に触れると、完全に消え去った

「な、馬鹿な!!!」

「まーだ分かんねえのか、注目すんのは炎でも紙でもねえよ、テムエは紙に何でルーンを刻んでやがった?さっきテムエで言っただろうが、インクだって、コピー用紙は破れなくても、インクは溶けるだろうよ、そんなぐらい気づけ馬鹿」

ステイルは、さっきの笑みとは全く真逆に、あせった表情を浮かべる

「上条」

「なんだ?」

「個人的な恨み、返させて貰うぜ」

俺は、能力を発動する

「なあ、プラズマって知ってるか？」

「!？」

「超高温の気体では原子核と電子の結合が維持できなくなり、原子が陽イオンと電子に分解してしまう。それによって生じた電子と陽イオンからなる気体をプラズマっていうんだけどよ……俺にはそれができちまうんだよな、俺の能力の本質がほとんど高電離気体プラズマに含まれてる」

俺の手の平を中心に、プラズマが形成されていく
そして

魔術師に向かって高電離気体プラズマが打ち出された
人を気絶させるだけの威力は充分だったろう

魔術師、ステイルプラズマキャノンマグヌスは、科学に負けた

「……高電離気体砲ってどうだろう」

「……勝手にしろ」

台無し、自分でもそう思った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2192y/>

気付いたら、そこは学園都市で

2011年11月6日02時07分発行